
俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

白蜜印のメイド漬け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

【Nコード】

N8456W

【作者名】

白蜜印のメイド漬け

【あらすじ】

生まれながらにして最強の魔術を持つ高校生、坂魔狂太郎。ありふれた日常を渴望する狂太郎にとって、この力は障害でしかなかった。そんな邪魔な力を狙って、本家の魔術師達が狂太郎を襲いかかる。「バカ野郎。これ以上、俺の日常を破壊させてたまるか」最強の高校生、坂魔狂太郎の戦いは始まった……！！

1 この世で最も強い高校生

坂魔狂太郎について。

彼と親しい友人に訊いてみた。

「狂太郎？ あー、あいつは最強。冗談抜きで最強だ。俺が狂太郎に出会った時も、あいつの周りには一千人の暴走族が土下座して謝ってたからな」

彼のクラス委員長にも訊いてみた。

「坂魔君？ 坂魔君はいい人ですよ。みんなは怖がっているみたいですが、彼はとても優しいんです。前も、私が先生に頼まれて教材を運んでいた時に、彼が一人で運んでくれたんです。三十冊の広辞苑を一度で」

彼の幼なじみにも訊いてみた。

「狂ちゃん？ あっ、いやっ、狂太郎！？ 別に、あいつとはただの幼なじみで……。はっ？ 関係じゃなくて印象！？ べべ別に、フツーなんじゃない！？」

デレた。

彼と全く面識のない先輩後輩にも訊いてみた。

「坂魔さんは……」

「やめろ！ 死に急ぐな！」

「坂魔様は……」

「それでいい。またあの力を使われたら終わりだからな」
人は彼の最強の力のこと、思い様々、口を揃えて言う。

あれは、魔術ですよ、と。

この内容を映した映像を見せられた張本人の感想は。

「何度も言わせるな」

彼は言う。

これは、魔術ではない、と。

『これは、狂科学だ』

その思いの丈を

正面でカメラを回す魔術師に向かって。

2 坂魔家の日常

何気ない一般家庭の朝。

家族で食卓を囲み、朝食を共にする。

そんな当たり前の幸せが、ここ、坂魔家にもあった。

姉の剣（つるぎ）の悩みと言えば、近頃、息子の狂太郎の帰りが遅くなってきたこと。

まあ、年頃の男なら、帰りくらい遅くはなるものだ。
むしろ、それぐらい元気であつてもらった方が嬉しい。

「と、剣姉さんは思うわけなんだが」

「ご飯の盛られた茶碗を渡しながら、剣は言った。

茶碗を受け取る狂太郎の手は怒りで震えている。

「わけなんだがじゃない。朝食に帰宅する高校生のどこが健全だ」
時刻は午前七時。

狂太郎が帰宅したのは、ほんの数十分前のことだった。

「相手は誰だ。天狗か。避妊はしたか」

天狗とは、お隣の娘さんのことだ。

幼なじみであるため、狂太郎にとってすれば、そのような対象にはならない。

「朝っぱらからヘビーなもんを食らわすな。それより、卵焼き焦げてるぞ」

奥のキッチンで黒い煙が上がっていた。出どころはフライパン。

弁当用の卵焼きを作っていたところだった。

「ああ、すまない。忘れてた」

剣はキッチンに戻った。後に続くように、狂太郎は冷蔵庫から岩海苔の入ったビンとタマゴを一つ持ってきた。

向かいのテーブルで朝食を取る。

ほっかほかのご飯にスプーン一杯の岩海苔を乗せ、その上に“溶き卵”を掛ける。醤油はいらない。岩海苔の味付けで十分なのだ。

「……あ、箸忘れた」

キッチンに目を向ける。剣がフライパンから焦げた卵焼きを剥がすのに苦戦していた。

力一杯、フライパン返しを使って奮闘していると、誤って焦げた卵焼きが床に落ちてしまった。

「……………」

すかさず、剣は焦げた卵焼きを掬ってフライパンに乗せた。

「よし、セーフ」

「アウトだよ」

「大丈夫だ。お前は最強だ。一万と八百の全ての魔術。その中に除菌の魔術があるからな」

「またそれか」

何気ない一般家庭の朝。

家族で食卓を囲みながら、朝食を共にする。

そこでの話の種に、必ず、その言葉が入ってくる。

「俺には、魔術なんかない」

“魔術”。

かつて存在したとされる代物。

現在には存在しないはずなのだが、坂魔家は滅びたはずの魔術を持っている。

「否定しても無駄だ。坂魔家は魔術一家だ。その血筋を持つお前にだって魔術はある」

剣は更なる追及をする。

「現に、お前は箸もなく溶き卵を作っただろう」

テーブルには、卵の殻すらなかった。

「それをどう説明する。物質変換と消滅の魔術を使ったからだろう」

「違うな。これは、魔術などではない」

狂太郎にとって、魔術とは。

日常を脅かす代物。

そのせいで、小中と悲惨な日常を送ってきたのだ。

だから、高校入学を機に決めたのだ。

魔術には関わらない、と。

だが、関わらないようしても、むこうは関わってくる。

離れようにも離れられない。こればかりは仕方ないこと。

しかし、だからと言って、そのまんま認めるわけにはいかない。

そこで、狂太郎は考えた。

魔術なんて忌々しい言葉を、もっと和やかにして置き換えよう。

そう、これは、科学。

現代でも証明のつく代物。

ただ、普通より少し特別なこと。

坂魔狂太郎の科学なこと。

「狂科学」だ」

3 美人な幼なじみの方程式？

剣は呆れていた。

「お前、今までの全てを科学で証明できると思っているのか？」

「狂科学とは、そういうものだからな」

ふふつ、と、狂太郎は誇らしげだった。

実の息子だが、時々、何を考えているのか分からなくなる。

剣の本当の悩みは、たぶん、これだ。

返す言葉もない剣をよそに、マイペースに朝食を済ませた狂太郎が席を立つ。

時間は七時半を回った。そろそろ家を出なければ、遅刻になってしまう。

別の椅子に立てかけておいたスクールバッグを取り、出かける準備に入る。

「いい加減、剣姉も諦める。魔術なんてものはない。あるのは、科学。そう、剣科学だ」

などと言いつつ、食器類をキッチンに運んで、弁当をスクールバッグに入れて、準備完了。玄関に向かい、扉を開けた。

「朝までには帰る。当然だ」

ボタン、と、扉を閉めた。

「朝までに帰る……か」

壁に吊されたカレンダーを見る。

「昨日も聞いたぞ、それ」

*

玄関を開けてすぐ、門の手に黒いショートカットの女の子を見た。

空庭天狗。狂太郎の幼なじみだ。

登校日の朝は、こうして門前で待っている。

「どうやら狂太郎に異性として好意があるようだ。」

「あ、狂太郎。遅いよ。」

「そっちが勝手に待ってたんだろ。」

振り払うようにして、狂太郎は門を通過する。

天狗は、先に行ってしまうおとする狂太郎の後に付いた。

「昨日も帰ってくるの遅かったけど、また魔術師と戦ってたの？」

「科学者な。それと、昨日じゃなくて今日だ。」

「狂太郎も苦労するねえ。魔術なんて持つてるばかりに。」

突如、狂太郎は後ろを振り返り、突き刺すように天狗を指差した。

「“狂・科・学”だ！」

結構、顔が近い。天狗はすぐさま引き下がる。

「分かった分かった！」

スクールバッグで顔を隠す。まったく、あんな距離で見たら、

心臓が止まってしまいそうだ。

「まったく……、本来なら美人な幼なじみと登校なんて非現実的な

シチュエーションすら許されないというのに……。」

ぶつぶつと愚痴をこぼしながら、狂太郎は前を進んだ。

そつとスクールバッグをどかす。

天然、なのだろうか。

（美人の幼なじみって……）

とは言え、心の中では、やっぱり嬉しかった。

狂太郎の後を歩くその足取りも軽かった。

4 朝ゾンビ!

学校に到着する。

天狗との距離を少し空けて、狂太郎は二階にある教室へと向かう。季節は春。目につく生徒達も、まだブレザーの着用が目立つ。

ちなみに狂太郎は長袖の白シャツのみ。アクセントとして長ネクタイをしている。

今に限ったわけではない。年中、この格好なのだ。強いて変化点を挙げるなら、シャツの袖の長さが変わるくらいだ。それ以外、何も変わらない。

何故、この格好にこだわるかと言うと、中学時代に悪い思い出があるからだ。

中学時代、狂太郎が皆と同じようにブレザーを着用していると、その風貌からか、次第に番長と呼ばれるようになっていた。

既に魔術が使えていたので、その辺の噂も加味された結果だ。

以来、狂太郎はブレザーを敵視するようになった。悲しい中学時代である。

教室に到着した。

「おはよう!」

狂太郎は皆に笑顔と挨拶を配る。

「お、おはよー……」

魂の抜けた、あるいは抜かれた声で返される。

賑やかだった教室が、一瞬にして氷河期に突入したような空気になった。

狂太郎は自分の席に着く。ちょうど教室の真ん中だ。

背が高いので、かなり存在感がある。

「また科学者と戦ったのか?」

右隣から高校球児のような爽やかな声が届く。

良き理解者であり親友である、五月屋霧雨こつきやきりさめだ。

「ああ。だが、こればかりは仕方のないことだ」

天狗は離れた席で、女友達と話をしている。

その間を、甘い花の蜜のような香りが通る。

香りに釣られて、そちらを振り向くと、アヤメのような淡い紫色の髪をした女がいた。

見たことのない生徒だった。少なくともこのクラスの生徒ではない。

女は目標が決まった歩き方をしていて、その矢印が狂太郎に向けられていることが見て分かる。

それにしてもいいカラダをしている。モデルのようなスラリと伸びた身長と美脚。まさに女の子の願望が凝縮されたスタイルだ。

そんな美人が、何故、狂太郎に？

天狗の関心は、女友達の会話ではなく、その謎の美人に向けられていた。

「でな、危うく落ちた黒こげの卵焼きを……」

狂太郎は話を止めた。否。止められた。

首を絞められ、厳密にはネクタイを引っ張られて。

刃のような切れ長の瞳が突き刺さる。

「お、お前、昨日の科学者……」

数センチ先には、見覚えのある顔。

狂太郎は、この女を知っている。

「科学者じゃないし、魔術師じゃないし、人間でもない。 ゾン

ビよ。あれだけ殺しておいて、もう忘れたの？」

刺激的な一日が始まった。

5 衝撃的な魔の夜

それは、忘れもしない衝撃的な夜だった。

帰路を遠く離れ、狂太郎が迷い込んだその場所は、長い鉄橋の上。数十メートル先を見下ろせば、川が流れている。

息切れする狂太郎の後ろには、魔術師がいた。

だけど、そいつはいつもの魔術師とは違った。

自分を科学者とも魔術師とは言わず、それどころか人間ではないとまで言ってきたのだ。

じゃあ何者だと訊いた時、返ってきた言葉がこうだ。

「ゾンビ」

嘘なのか本気なのかは定かではない。

ただ、いつもの魔術師と違って、魔術を殺しても復活してくる。

これ以上逃げても、埒がない。それ以前に帰りがとんでもないことになる。

十数メートル離れた先で、狂太郎は自称ゾンビのその女と向き合った。

「全く息切れしてないのな」

声は反響する。

「そういうカラダだから」

やけに色っぽく感じるのは、声のせいだけではないのだろう。

「死なない科学か」

「さっきも言ったけど、私は科学者でも魔術師でもないから、これは体質的なものね」

「ふふふ、あくまでもゾンビと言い張るつもりか」

「事実だから覆しようがないわ。そもそも、死なないという点だけで言えば、あなたとも共通することなのよ」

この女は、狂太郎が一万と八百の全て魔術を使えることを知っている。

狂太郎の経験上、そういうのは全員、魔術師だった。
だから、この女も

「……何故、俺を追う」

「追うんじゃないくて、殺すの」

「殺される覚えはないのだが、一応聞こう」

「そうね。手短にまとめると、あなたが無意識に使っている魔術が、少なからずマイナスに働いているってことかしら」

「俺は科学で他人に悪影響を与えてなどいない」

「あなたはそのつもりでも、相手にとってすれば、そうとも限らないんじゃないかしら」

「どういう意味だ」

女は少し悩み、躊躇っていた、というより、説明が面倒で後回しにしたことを話すことにしたようだ。

「そうね。例えば、一冊の推理小説があるとして」

「おいおい。そんな話は聞いていないぞ」

「面倒ね。いいから黙りなさい。それとも」

女が左右に突き出した合計十本の指の先で、鋭く輝く銀色の光が見えた。

一瞬の光を放ったそれは、解剖用の小刀である。

「黙らされるほうが好みかしら」

女は己の性癖を惜しみなくさらけ出してやった。

「私としては、黙らすのも黙らせるのも黙らされるのも好みなんだけど、いかがかしら」

流暢に性癖をさらけ出していると……

パキン

十歩のメスが文字通り粉碎された。

キラキラと舞う銀色の粒が、ゆったりと地に眠る。

「お前の性癖はよく分かった。だからこれ以上、無意味な戦いはやめろ」

「無意味な戦いじゃないし、私の性癖も解ってないわ」

狂太郎は驚きの光景を目の当たりにする。

粉碎したはずのメスが、厳密にはそうなった粒の集まりが、女の手元に吸い寄せられているのだ。

それは完全に重力を無視した動きであり、そうした動きによって復元された十本のメスもまた、色んなものを無視している。

「厳密に言えば、あなたは不死じゃない。何故なら、あなたには一万と八百の命しかないのだから」

「それはつまり……なんだ。一万と八百回俺を殺す自信があるということがあるか」

「殺すのは最後の一度切り。それまでは、一万と七百九十九回までは、勝手に放題ってこと」

女は心底嬉しそうな顔を浮かべていた。

認めよう。この女はゾンビだ。

ただ

化物ゾンビみたいな感性を持っているという意味で。

「不死というのは、死なないだけで痛みは感じる。一般的には不老というボーナス付きだけど、それでも痛みは感じる」

「逆に言えば、一生痛め続けられる、ってことか」

「あら、解ってきたようね。でも惜しい。百点の解答は、痛め続けるのも痛み続けられるのも、でした」

「まあ……“魔術”が嫌いな俺だが、そんな俺でもやっぱり死にたくはないんだ」

トン 狂太郎はその場で軽く足踏みをした。

すると次の瞬間

バキッ……！！

「酷いことするのね」

鉄橋が半分、折れた。

女の立つ方を残し、中心からポッキリと。

幾数の破片と共に落下する狂太郎だが、この数ではまず死なないだろう。

「お互い様だ」

盛大な水飛沫と音に紛れ、気付いた時には、狂太郎の姿はその場にはなかった。

一人取り残された女は、気分的に折れたそこから川を覗き込んでみたくなり、ゆっくりとそこに座り込んでみた。

「あんな大きな落とし物して。私がゾンビじゃなかったら、新聞の一面を飾つてるところだったわ」

むくり、と、橋の破片を川の水を垂らしながら、浮き上がってくる。

「さてと……朝が来る前に帰らないと」

ゾンビに朝は向かないわ。

6 洗淨院魂慧の入学初日

つい数時間前までの悩みの種が、また目の前に。

狂太郎は自分を恨んだ。己の人生に溜め息が出る。

「狂太郎、知り合いか？」

「……ああ、がつつりな」

「あら嬉しい。がつつりだなんて」

自称ゾンビ女のマイペースっぷりに、違った溜め息が出る。

何やらただ事ではない空気。そう感じ取った天狗が、前に身を乗り出してきた。

「ちよつとあなた何者！？ 急に教室に入ってきて！」

挑発的な天狗の態度に、しかし自称ゾンビ女は乗らない。

それどころか目すら合わせていない。

腕を組んで、毅然とした態度で立っている。

その反抗的な態度が、逆に天狗を挑発する。

「む、無視する気！？」

「そう怒らないで。天狗さん」

と、ごく丁寧に仲介に入ってきたのは、おさげと縁眼鏡がポイントの黒屍綺羅羅だ。

彼女は、学級委員だ。

「委員長！ だって、この子が……」

「彼女は、洗淨院魂慧さん。今日からこのクラスの仲間になる方なんだから」

今日からクラスの仲間になる。

委員長のその言葉を、天狗が、そして狂太郎が、咀嚼し、こう理解した。

「て、転校生……？」

にっこり笑顔で、委員長は言葉を返す。

「転校生じゃなくて、時期的には私達と同じ新入生ね」

何かが崩れ落ちた音が、二人の中で聞こえた。

*

狂太郎が魂慧をそこに呼び出したのは、一限目終了後のことだった。

「屋上に呼び出しなんて、随分と古典的な手法を取るのね」

やはり毅然とした態度で立つ魂慧に、狂太郎は、俄然腹が立つてきた。

「このシチュエーションを馬鹿にするな」

「シチュエーションだなんて、そんな……」

「その演技臭い言い回しはやめろ。聞いててイライラする」

と、ここで、魂慧のペースに落ちている自分に気付く。

「……お前、何だ。わざわざ同じ学校にまで入ってきて」

「一つ訂正するなら、別にあなと同じ学校に入ったわけじゃないわ。たまたまよ」

何とも信用できない言葉だ。

「……まあ、そういうことにしておいてやろう。でも、結局は俺の命を狙ってるんだろ？」

「絶好の監視下だとは思っけど、人殺しをするには不適切だと思うわ」

どうやら狂太郎が思っていた理由で入ってきたわけではなさそうだ。

「本当に、ただ学校に入っただけなのか？」

「あなたにはそう考えてもらっていいわ」

「なんだそりゃ？」

「他意はないわ。それよりいいの？」

お気に入りの屋上シチュエーションも、入って初日の新入生を呼び出すとなれば、十分に非日常的だけでも」

言われて気付く。

そういえば、俺はこいつを知っているだけで、皆からすれば、魂
慧の言う通りだ。

「いかん……。これ以上の崩壊だけは免れねば！」

狂太郎は颯爽に、屋上から姿を消した。

「……おかしな人ね」

偶然なのかどうかは知らないが、話していたその場所は、日陰の
ある場所だった。

7 午後の三角地帯

その後も魂慧を警戒し続けてはいたが、彼女は特に変わった様子もなく、普通に授業を受けていた。

新入生とあつて、周りからも物珍しい反応されていたが、逆に怪しいくらいに全て応えていた。

何か危険なことを考えているのではと思っていたが、考え過ぎなのだろうか。

複雑な心境のまま、昼食を迎える。

狂太郎はいつも通り、霧雨と昼食を共にする。

そしてこれもいつも通りと言えればいつも通りなのだが、

「お前は女友達と食べばいいだろう」

天狗も昼食の輪に入ってくるのだ。

他人の机を我が物にし、こちらの机にくつつけてくる。

傍から見れば、この教室中央に出来る三角地帯は見慣れたものだろう。

狂太郎はあまり歓迎していないのだが。

ちなみに昼食は霧雨のみがコンビ二で買ったもので、他二人は弁当持参だ。

机上に各々の昼食を広げる。

狂太郎の弁当は妙な空白が目立つが、天狗のは見た目も栄養も考えられた素晴らしい内容だ。

脇目で見る。触れると調子付くので触れないが、本当に素晴らしい。こういう料理上手な嫁が欲しいものだ。

「剣さん、またやったの？」

「毎日の恒例行事にされちゃ身が持たん。後、そのレモンくれ」

天狗は切ったレモンを一枚と、肉も少し分けてあげた。

「高校生が昼間からビタミンを要求するなんて悲し過ぎるから、それ食べて力つけなさい」

むしゃむしゃとコツペパンを頬張る霧雨。

「空庭は狂太郎にベタ惚れだなー」

冗談で口にした一言だったが、天狗は容姿しない。

素早い手捌きで箸を眼球寸前まで近づけてきた。

「ほ、本気にするなよ」

「物騒なランチタイムね」

二人の間を割ってやってきたのは、魂慧だった。近くの机を引きずって、どうやら昼食を共にする気のようなようだ。

「洗淨院、お前も他に女友達がいるだろ」

「自分で言うのも何だけど、私は国内の一般女性の平均値は越えていると思うのだけれど。それとも坂魔君は異常値の女性でないと満足しないのかしら？」

「論点がズレてるが……まあいい。最近、この午後の三角地帯を巡って良からぬ噂が流れているからな」

「良からぬ噂がここで止まるとも限らないわ」

不吉なことを言いながら、魂慧は席についた。ちなみに彼女も弁当持参だ。

「私のお弁当に熱い視線を送っても、何も答えてくれないわよ。坂魔君」

「何か儀式めいたものが出てきそうで怖いんだよ」

「そうだったら、術式破壊の魔術を使えばいいじゃない。絶対防衛の魔術も付加すれば、相殺の魔術も効かないのだから」

狂太郎は黙々と飯を食い続けることで、話を無視した。

熱い視線といえは、もう一人、別の人物が 天狗越しから送っていた。

委員長長の綺羅羅だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8456w/>

俺の狂科学がこんなに最強なわけがない

2011年10月12日03時03分発行